

『沈思黙行』

インターネットは、決して主人公にならない。
人は考え、人が動き、
その足跡として発信すべき何かが生まれる。

インターネットはあくまで
人生の小道具なのだ。

PJ PED BITS

「レイ・パスツール」 アルバート・エーテルフェルト

佐谷宣昭 Nobuaki Satani
1972年生まれ。九州大学工学部建築学科卒業。2000年九州大学大学院人間環境学研究科博士課程修了、人間環境学博士。翌月起業。パイプドHD株代表取締役社長。明日の豊かな情報生活に貢献したいとの想いから「情報資産の銀行」の必要性を説く。情報資産プラットフォーム「スパイラル®」など、官公庁や民間企業を中心に1万を超える契約数に至る。

パイプドHD株式会社
東京都港区赤坂2丁目9番11号
03-5575-6601(代表) <https://www.pipedohd.com>

「国際的な広告賞を2回以上受賞しているデザイナー やアートディレクター」という条件があつた。ちなみに、問題となつた新国立競技場も同様で、応募資格はプリツカー賞、UIA(国際建築家連合)ゴールドメダルなど、5つの国際賞のいずれかの受賞者に限られていた。応募資格を絞ることに積極的な理由を見出すとすれば、それは第一に「信用」であるはずなのだが、選ばれた人間が信用されないという皮肉な結末となつたのだ。これまで業界の村社会の中でうまく収められていた問題が收められない。ソーシャルメディアが知的財産の認識も乏しい村社会の実態を暴き出してしまつたのだから。

つまり、過去の実績により国民の多くは佐野氏を信用できない。信用できない佐野氏が作成したエンブレムも信用できないので認められない、ということになる。今回のエンブレムについて盗用が認められたわけではない。デザインの創作プロセスには一定の正当性も感じられだし、登録商標上の問題もなかつたのだから。

佐野氏案が選出された審査では、応募資格に

大会エンブレムを作成したデザイナーの佐野氏は8月5日に記者会見を行い、「デザインの盗用疑惑を否定していた。しかしその後、佐野氏が大会エンブレムの展示例として示していた羽田空港の写真や、佐野氏が関与したビールメーカーのキャンペーン賞品のデザインの一部などで第三者の著作物を無断転用していたことが発覚し、佐野氏に対する不信感が広がつていった。結局、大会エンブレムのデザインは盗用ではないとしたがらも、国民に受け入れられないエンブレムは五輪に悪影響を与えるかねないと理由で、佐野氏自身がエンブレムを取り下げたいとの意向を示し、組織委員会がこれを受理したと

いう。

9月1日、東京五輪組織委員会は、2020年東京五輪の公式エンブレムの使用を中止する旨を発表した。

ベルギーのリエージュ劇場のロゴをデザインしたオリビエ・ドビ氏が、東京五輪の公式エンブレムが同劇場のロゴと酷似しているとして、JOC(日本オリンピック委員会)などにエンブレムの使用差し止めを求めていた。

『東京五輪と村社会問題』

